

美しく熟していく

『人生フルーツ』2016年
伏原健之・監督

「お金は次の世代に渡せないけれど、土地を良くすれば絶対に作物は誰にでもできるから」

そう自信を持って話すのは、愛知県高蔵寺のニュータウンに一軒家を構える九十歳の建築家・修一さんと八十七歳の妻・英子さん。二人の生き方は、余生と呼ぶにはあまりにも忙しい。庭に野菜七十種とフルーツ五十種。「つくれるものは自分でつくる」暮らしを四十年間実践してい

る。

修一さんは、三十六歳の時に住宅公団のエースとして高蔵寺ニュータウンの設計を任された。生活の中に雑木林を残し、風の通り道をつくる。そんな未来を描いていた。しかし経済優先の時代の中で、思いとは裏腹に山は削られ谷は埋められた。できあがったのは、同じ方を向く個性のない建物ばかり。「どこに自分の家があるか分からない町はあまり人間

的ではない」。修一さんは建築界の表舞台から姿を消す。

でも、このニュータウンからは離れて家を建てた。小さな雑木林をつくって、一人一人でも里山の一部をつくれるという実験をやってみるために。静かな挑戦だ。

それから四十年。育った雑木林には風が吹き抜け、落ち葉は畑の栄養となり土をつくる。野菜やフルーツ

は丁寧収穫し、毎日の食卓へ。梅干し、干し柿などの保存食は、おしみなくお裾分けする。足るを知り、当たり前のように分け合う暮らしが積み上げられていた。

そんな毎日が突然壊れてしまう。ある日、修一さんはいつもの昼寝から目を覚まさなかった。これからどうやって生きようか……英子さんは途方に暮れながらも、畑を耕し料理をつくる。そこには、修一さんの残した言葉と生き方があった。

「一人でやれることを見つけてそれをコツコツやれば、時間はかかるけども何か見えてくるから」

二十代の頃の私は各地を転々として、自分の居場所や役割を模索していた。野菜作りや味噌作りにはじま

り、二時間かけて薪でお風呂を炊き、バケツで近所に豆腐を買いに行く生活も体験した。だけど、何かしっくりこない。丁寧な暮らしのうわべを真似していただけだったのだろう。三十代になり、手触りのあるもので暮らしをつくっていききたいと考えるようになった。

きっと、二人は「自分や周りを大切にする暮らし」を毎日積み重ねていた。だから、やるべきことが目の前に真っ直ぐ見えていたのだ。すつと伸びた一本の木に太陽の光を浴びて育つ実は、風に揺られながら時を熟し、やがて朽ち果て土に返る。そんなフルーツのように甘酸っぱくて美しい、それが人生なのかもしれない。「長く生きるほど、人生はより

映画に登場するフルーツはどれも生き生きして見える

